

戦後60年

写真で語り継ぐ平和の願い



東京都北区

【目次】

回想録 北区炎上	内田 康夫	2
口絵		4
戦争の時代		10
農村から軍都へ		10
隣組の総力戦		12
戦場へ戦場へ		14
銃後の国民生活		16
女性の動員		18
戦時下の子どもたち		20
空襲前日の北区		22
区民にとっての戦禍		24
空襲のきずあと		26
データ 北区の空襲 北区戦災焼失区域		28
終戦から復興へ		30
軍の解体と占領		30
買い出しとヤミ市		32
戦後の復興と民主化		34
軍用地解放への道のり		36
データ 北区戦争関係年表		38
北区に残る戦争の記憶		42
浮間・赤羽地域に残る戦争の面影		42
王子・十条地域に残る戦争の面影		44
滝野川・西ヶ原・豊島地域に残る戦争の面影		46
北区戦跡まっぶ		48



平和への願い

— 発刊にあたって —

東京都北区長 花川 與惣太

昨年は戦後六〇年を迎え、北区では平和祈念事業の一環として戦後六〇年誌の編集に取り組んできました。

区民の皆様の中には、さきの戦争で大変つらい思い出をお持ちの方々もいらっしゃると思います。戦争が終わって、六〇年が過ぎた今日、戦争の記録と記憶を風化させることなく、未来に向かって語り継いでいくことが必要です。

このたび発刊した「戦後六〇年」写真で語り継ぐ平和の願い」は、当時の様子を写真で紹介し、戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継いでいくことを目的としたものです。

戦後、北区は区民の皆様のたゆまないご努力のおかげで、発展・成長を遂げておりますが、これからも、北区基本構想にある「ともにつくり未来につなぐときめきのまち——人と水とみどりの美しいふるさと北区」を、未来を担う子どもたちに引き継ぐことが、私たちに課せられた大きな責務であります。

今年は、世界の恒久平和と永遠の繁栄を願い、昭和六一年に北区が「平和都市宣言」を行ってから二〇年の節目の年でもあります。

区民の皆様には、この機会に、あらためて平和について考え、祈り、願い、そして語り継いでいただければ幸いと存じます。

終わりに、写真・資料等の提供にいただきました皆様に心からお礼を申し上げます、発刊の言葉といたします。

平成一八年三月

平和都市宣言

真の平和と安全を実現することは、私たちの願いであるとともに、人類共通の悲願であります。

私たちは、日本国憲法に掲げられた恒久平和の理念に基づき、平和で自由な共同社会の実現に向けて努力しています。

人間のぬくもりを感じるふるさと、美しい自然をこれから生れ育つ子ども達に伝えることは、私たちに課せられた大きな責務であります。

私たちは、わが国が非核三原則を堅持することを求めるとともに、心から世界の恒久平和と永遠の繁栄を願いつつ、ここに北区が平和都市であることを宣言します。

昭和六十一年三月十五日

東京都北区

※今年は、平和都市宣言を行って二十年を迎えます。

協力者一覧

本誌作成にあたり、多くの方々より貴重な写真や資料の提供、ご協力、ご助言をいただきました。紙幅の関係上、ご提供いただいた写真など、全てを載せることはできませんでしたが、記して心より感謝申し上げます。

個人

青木豊一 青地弥一郎 石井裕 石渡博之 市村謙一 伊藤悦子
稲葉朝成 大岡富士雄 岡本泰基 加藤欣一 加藤貴 鎌田和美
河合良之 川崎誠 河奈輝夫 木村克治 倉木常夫 栗原和彦
笹目孝蔵 佐藤明俊 篠美津子 清水智恵子 清水吉一 志村道代
鈴木和子 高木孝子 高木文夫 高田滋子 高橋綾子 高村聡史
竹内正吉 竹内昭八 竹村泰三 田巻麻子 手川武 年代茂
橋本祐可子 羽田博昭 馬場永子 ふじさわひでこ 藤代真代子
藤田正道 馬渡令子 宮坂吉郎 三好陳行 柳屋美子 吉田清子
領塚友治 領塚正浩 渡辺昭 渡辺嘉之

学校

荒川小学校 滝野川第三小学校 堀船小学校

機関・団体

朝霞市博物館 飛鳥山博物館 板谷波山記念館
国立国会図書館蔵書資料室 自衛隊十条駐屯地広報班
田端文士村記念館 豊川保育園 日本地図センター
練馬区郷土資料室 ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館
富士見橋エコー広場館暮らしの博物館

(五十音順 敬称略)

凡例

※本誌に掲載した写真や文章の中には、人権意識などの観点から現在使われていない表現も見られますが、当時の実態を示すものとしてそのまま使用しています。また、一部の写真については、個人情報保護のため、名前・住所などを削っているものがあります。

※本誌に掲載している写真および文章の無断転載を禁止します。

北区炎上

02

内田康夫

絶え間なく、鼓膜を震わせていた焼夷弾と高射砲の音が、ふいに絶えた。暗闇を、微臭い湿った空気が異様な静けさが支配した。

母と中学一年の兄と国民学校五年になったばかりの僕と姉妹と赤ん坊の弟は、防空壕の底でじっと息を潜めていた。

父は医師で、空襲警報の発令と同時に、小峰病院（現小峰クリニック）の救護所に駆けつける。後で聞いた話だが、その頃、病院ではすでに地獄絵図のような修繕場が始まっていたらしい。

救護所には負傷者が次々に運び込まれ、中には頭を半分飛ばされたような少年を抱えた父親が、「なんとか助けてくれ」と叫んでいたそうだ。足元がヌルヌルして滑りやすいので見ると、一面の血の海だったという。

昭和二十年四月十三日の深夜——日時の大編隊が去って、僕たちはエアポケットのような静寂の中になった。ズシンズシンという着弾音はもう恐ろしいが、いっさいの音が消えた闇の恐ろしさも、響えようがないほど恐ろしい。

そのうちに、無音状態に慣れた耳に、かすかに、カラン

カランという乾いた音が聞こえてきた。音はやがて大きく、無限のひろがりになっていった。

（なんだろう？）

誰も不安そうに、見えない闇の中で、たがいの目を確かめ合おうとした。それからまず兄が、つづいて僕が、おっかなびっくり、鬼の子のように防空壕の外に頭を突き出した。何気なく見上げた空の景観は、六十年経ったいまもありありと憶えている。

暗闇の夜空に、地球を丸ごと覆うほどにちりばめられた真紅の星が、東から西へ流れていた。尾久から王子にかけての下町一帯が燃えているのだらう。火の粉が火災によって生じた上昇気流に乗って舞い、飛鳥山や廣事試験場（現滝野川公園）を越えて、真台にある西ヶ原の上空に達し、浮力を失って落ちてくる。カランカランという音は、火の粉が家々の瓦屋根を叩く音だった。

あの圧倒的な火の粉の星空の下では、日頃の防空演習の成果など、発揮しようがなかったにちがいない。板根の向こうを裏の煉瓦一家が逃げて行く。ふだんは威勢のいい年老いた棟梁も、女子供を引き連れてびたすら逃げて行く。非戦闘員ばかりのわが家も、それに倣うはかばかしくなかった。

車両の切り離しにかかっていた。

そのうちに、いつか眠りに落ちた。

朝、延焼が鎮まったのか、それとも燃えるものが燃え尽きたのか、薄煙の漂う街を歩いて自宅へ向かった。途中、意外にも上中里の街は風々と焼け残っていて、僕たちにかすかな期待を抱かせた。しかし現実は一瞬、西ヶ原はほぼ全城が焼けたのである。

真っ白な灰に覆われた焼け跡に、父が茫然と佇んでいた。ぎりぎりまで救護所に詰めていて、西ヶ原の街が火に包まれる頃になって駆けつけたが、すでにわが家も燃え始めていたそうだった。貴重品とトランク一つだけを持ち出して逃げるのが精一杯。五十年かけて築いた財産の、それがすべてになった。

その時、父はなぜか、僕たちに困ったような顔で笑って見せた。

三月十日の大空襲で、十万人ともいわれる死者が出たことが、誰の頭にもあった。

都電が走る表通りに出ると、飛鳥山方面から逃げてきた人々が群れ、走っていた。その人波に押されるように、僕たちは平塚神社の境内へ逃げ込んだ。しかしそこも安心できる場所ではなかった。二十メートルを越える木々の梢が、松明のように燃えていた。

警防団員の指示のまま、僕たちは神社脇の坂を上中里駅へ向かって走った。坂を下りきり、広大な田舎様様を見下ろす崖の上に立って、息を呑んだ。その向こうの下町一帯が火の海であった。

警防団員は足を停めずに走れと叫ぶ。間もなく頭上の上中里町にも延焼してくると予想しているのだ。団員に先導され、人々は目の前に広がる火の海に突っ込むように、操車場を跨ぐ陸橋を渡った。渡りきったところで土手の手前の操車場に下りるといふ。すでにそこには避難してきた人々が群れ、土手下の溝に身を縮めていた。狭い溝にひしめき合うように押し込まれた。

酸臭が燃え尽きたのか息苦しく、流れ込む煙を吸って咳き込んだ。操車場の貨車に火がついて、大人たちは燃える



（内田康夫氏撮影）

北区西ヶ原生まれ。長野県軽井沢町在住。
昭和55（1980）年「死者の水鏡」で作家デビュー。
昭和57（1982）年から作家兼編集者。
作品に登場する主人公、名探偵・浅見光彦は
北区西ヶ原三丁目に住んでいる設定で、小説には、
北区がたびたび登場します。
また、平成8（1996）年から「北区アンソロジー
（大衆）」として、作家近藤等が北区のイメージアップ
にご協力いただいています。

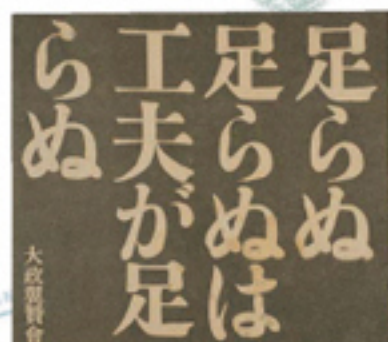
欲しがりません勝つまでは



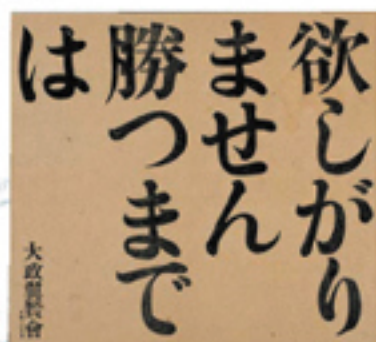
【警防手帳】
警防団員が携帯した（現島山博物館所蔵）



【警防手帳】
警防団員が携帯した（現島山博物館所蔵）



大政翼賛会のポスター「足らぬは工夫が足らぬ」
（清水吉一氏提供）



大政翼賛会のポスター「欲しがりません勝つまでは」
（清水吉一氏提供）



【東京市街地図】
東京市からの伝達事項が掲載され、各機関で閲覧された
（西条幸子氏提供）



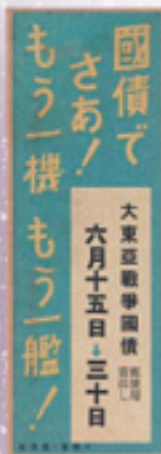
戦時下に発行された様々なパンフレット類
（本村克彦氏提供）



【東京新聞四版】人真顔開
高橋孝や結見の地方転居を報じている（田嶋麻子氏提供）



【東京新聞四版】何がある人でもカボチャを作れ
カボチャは家庭菜園のほか空き地や道路のわきなどでも
栽培された（田嶋麻子氏提供）



大東亜戦争国債
六月十五日と三十日
【国債で さあ！もう一機 もう一艦！】
（清水吉一氏提供）

軍都の残像



東京第一陸軍造兵廠監督監製會旗（ふじみ野市立上郷岡田公民館資料館所蔵）



【陸軍造兵廠火工廠跡はがき】
（北沢行政資料センター所蔵）



東京第一陸軍造兵廠十島工場紅葉門の表札
（現島山博物館所蔵）

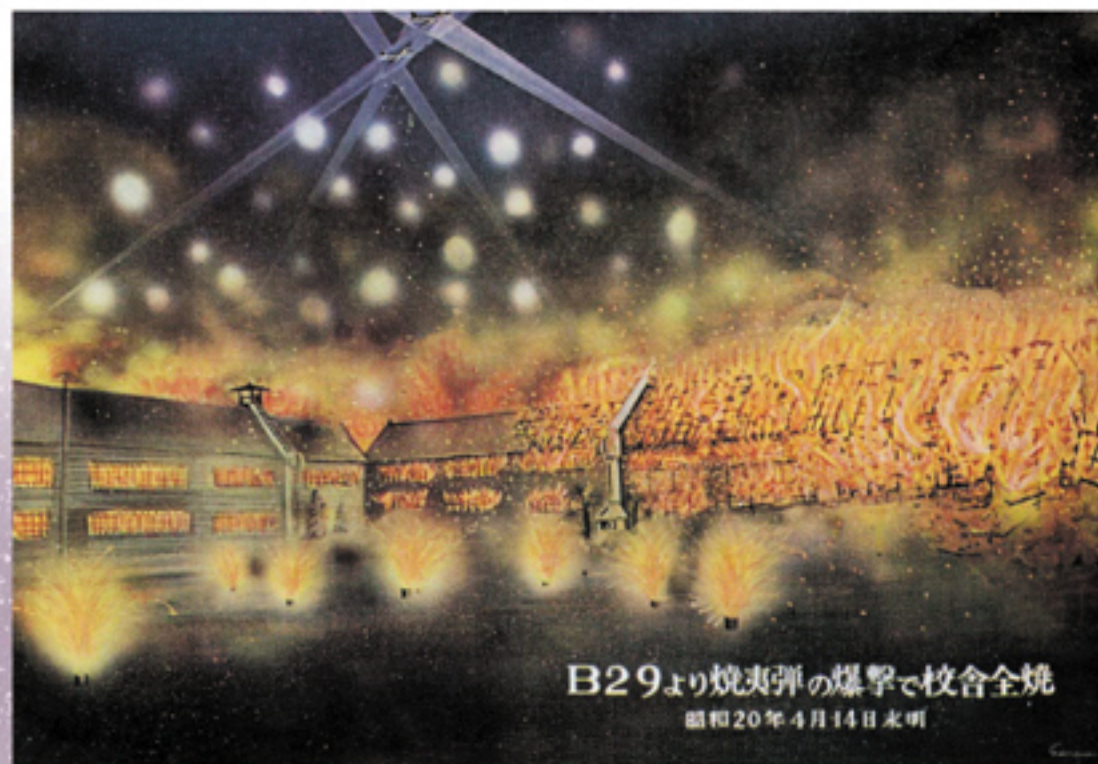


東京第一陸軍造兵廠十島工場紅葉門に
付けられていた表札（現島山博物館所蔵）



【陸軍造兵廠創立五十周年記念報章】
（北沢行政資料センター所蔵）

描かれた戦争



B29より焼夷弾の爆撃で校舎全焼
昭和20年4月14日未明

関口五郎氏画「B29より焼夷弾の爆撃で校舎全焼 昭和20年4月14日未明（昭和国民学校）」
〔昭和小学校創立50周年記念誌〕より転載

空襲警報の中で



灯火管制用従軍式電灯傘
空襲の中で光を周囲に漏らさないように使われた
（鹿児島博物館所蔵）



当時の家屋用消火器
構造は新潟県市用のポンプと同様
（三好隆行氏提供）



手製の非常持ち出し袋
（秋田縣みつ子氏提供）



M89型通風機高弾（子弾）
1発の群弾の中に38発の子弾が入っていた
昭和20年4月14日未明、東京近郊地域への
空襲で足尾4丁目に落とされたもの
（須藤友池氏提供）



鉄帽
空襲下で市民に使用された
（三好隆行氏提供）



手榴弾消火器
ガラス製で中に液体が入っている
（石渡博之氏提供）



高木孝一郎日記 昭和20年
4月14日未明の空襲により十巻の高木家は全焼したが、残った数巻の中、
49冊の日記が家族によって運び出された（高木孝子氏提供）

アメリカ軍機が散布したチラシ

08



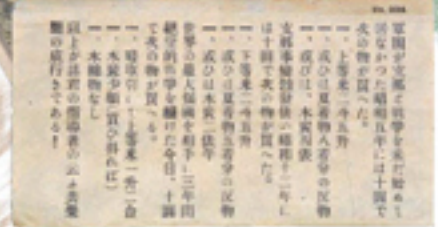
「落下傘ニュース」
アメリカ軍の戦果を伝えている
（故今井豊子氏提供）



「新ばあさんの秋」
戦後は沖縄県那覇市の
空襲被害を示す航空写真
（故今井豊子氏提供）



「日本軍部指導者被虜」
降伏を呼びかけている
（故今井豊子氏提供）



「地味」
表に現在10円紙幣の図案、裏に日本の敗戦者への批判が記してある
（故今井豊子氏提供）



「ワリヤナ時間」
新聞のような体裁である
（故今井豊子氏提供）

戦争の時代

第1章

人や車が行きかう現在の
王子駅前。
時間を六十年さかのぼっ
てみると、焼け野原が広
がっていた。
そこは戦争の時代だった。



昭和



昭和45年3月（故石井平八氏提供）



昭和28年5月10日（故平川文夫氏提供）



昭和20年4月14日（故石井平八氏提供）

故今井豊子

陸軍造兵廠

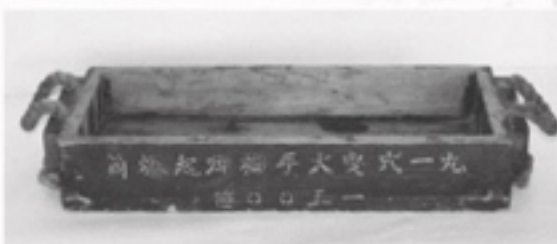
十条や豊島、滝野川周辺には明治期から、弾薬を製造・貯蔵する施設が造られた。それらは、砲兵工廠や造兵廠火工廠など、時期によって様々な名を変えたが、太平洋戦争の時期には、東京第一陸軍造兵廠十条工場、滝野川工場、尾久工場、東京第二陸軍造兵廠王子工場、板橋工場などと呼ばれた。



豊川保育園の庭から見た旧東京第二陸軍造兵廠王子工場の建物 昭和31年（豊川保育園所蔵）



陸軍兵務部附第十島嶼駐屯長の軍服（群馬県郷土資料館所蔵）



陸軍造兵廠滝野川工場と埼玉県川越製造所の間を往復していた部品入れの木箱（ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館所蔵）

江戸時代の北区域は、農村そのものであった。明治維新後、石神井川が工業用水に適していたため、新政府は滝野川や板橋周辺に火薬製造所を設置した。それ以後、大正時代にかけて、軍の部隊や工場が、広い用地や演習地を求めて、都心や下町から赤羽や十条周辺へ拡張・移転してきた。このように、軍の施設が集中したため、北区域は軍都と呼ばれるようになったのである。



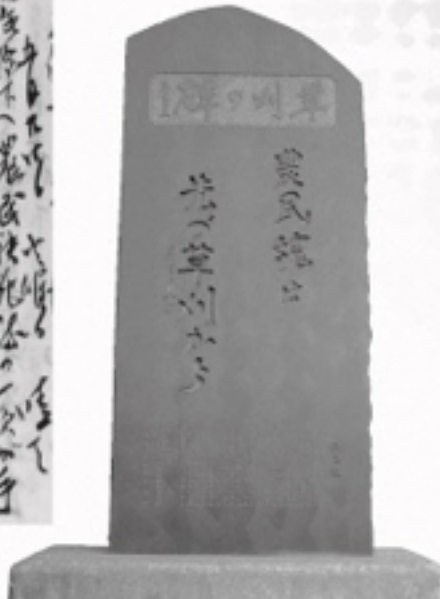
我が国国防工務工務見ル
「高木勘一郎日記」明治41年9月14日
（高木孝子氏提供）



東京砲兵工廠職工長の訓令
（市村雄一氏提供）

都市と農村の境界

北区域は、東京への北側の入口にあたり、かつては都市と農村の境界であった。そのため、昭和初期の農村恐慌は、北区域にも様々な影響を与えた。昭和七年（一九三二）の五・一五事件は、恐慌下の農村の窮乏を憂い、国家改造を目指した青年将校たちによって引き起こされた。この時、東京の停電をねらって田端電線所などを襲った農民決死隊は、王子の石神井川に手榴弾を捨てた。政府は、財源の不足から、農村恐慌に対して具体的救済策を示せず、農民自身の自力更生を目指す農村更生運動に期待した。農村更生運動の一環として、全国から青年を動員した全日本草刈り選手権大会は、現在の北区域志茂の荒川堤防であった。現在、荒川赤木門緑地にある「草刈の碑」は、この草刈り大会を記念したものである。



五月廿四日 火曜日 晴
合衆橋へへ農民決死隊の二員が手榴弾を投じた。その由にて之を捜索の爲め石神井を襲きて自衛隊が三三台にて後援機を動かした。見せり（合衆橋の下より）

五・一五事件の農民決死隊に関する「高木勘一郎日記」の記述（昭和7年5月24日）

全日本草刈り選手権大会を記念した「草刈の碑」 碑文は国書館蔵（荒川赤木門緑地）

農村から軍都へ



陸軍被服本廠の教育隊（河合貞之氏提供）

陸軍被服本廠と工兵隊



荒川に舟橋を架ける工兵隊の模様（青木重一氏提供）



陸軍被服本廠の紋章が入った茶碗（朝霞市博物館所蔵）



陸軍被服本廠の市製紋章（朝霞市博物館所蔵）



陸軍被服本廠の紋章が入った小皿（朝霞市博物館所蔵）



昭和初期の赤羽駅周辺 故道辺荒川（北区域を考える会編「北区域土史」より転載）



荒川付近での被服本廠教育隊の演習（河合貞之氏提供）

戦前からあった町内会は、戦時下には「丁目」として再編成された。昭和十五年（一九四〇）には大政翼賛会の下部組織となり、隣組も発足した。さらに、昭和十八年（一九四三）、町内会は地方行政機関の一部に組み込まれた。隣組は数軒から十数軒ずつで構成され、町内会の下部組織として配給などに関わった。

町内会と隣組



「五子区隣組図鑑」―自衛隊の活動などを載している昭和18年3年（清水吉一氏提供）

戦争中に使われていた隣組常会記録簿など（本村克治氏提供）

戦時下に結成された隣組は、配給、広報類の回覧、国債の購入や貯蓄の奨励などに関わった。さらに、警防団の指導のもと、隣組防空隊が組織され、防空訓練が繰り返された。東京に住む者にとって、戦争とは空襲との戦いであり、地域ぐるみの「総力戦」だった。

隣組の総力戦



岩淵町1丁目（現・赤羽2丁目）での防空訓練（河合隆夫氏提供）



本渡町3丁目（現・本渡5丁目）での防空訓練（高田道子氏提供）

防空・防火訓練

女性たちは町内会や隣組などを通じて、バケツリレーなどの防空・防火訓練に参加した。



防火隊員によるバケツリレー（高田道子氏提供）



当時の消防車（北区行政資料センター所蔵）

消防組・防護団から警防団へ

北区内において、消防のための民間組織である消防組は、明治時代から各町内や大字を単位に結成されていた。一方、防護団は、「満州事変」後の昭和八年（一九三三）に警察署の主導で結成され、防空演習の中心になった。

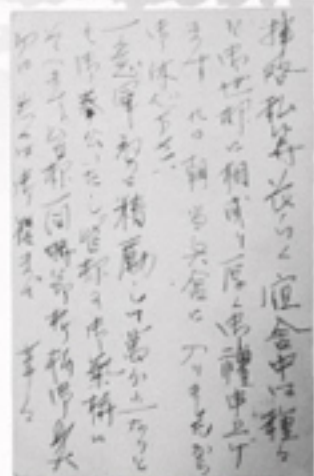
しかし、消防組との間で人員や役割の重複があったため、昭和十四年（一九三九）公布の警防団令により、消防組と防護団は合併し警防団になった。

志村赤羽門
赤羽警防団
班長ヲ命ス
昭和十四年一月一日
警視廳

赤羽警防団班長の委任状（志村義典氏提供）

兵士の宿泊

戦時下には、兵士が増えたため、軍事施設周辺の家には兵士が宿泊することがあった。



宿泊した兵士からの礼状 昭和12年（田嶋麻子氏提供）

民家に宿泊した兵士と宿泊先の子供たち 昭和18年（河合隆夫氏提供）



「隣組防空訓練実施要領」防空訓練の手順が書かれている（田嶋麻子氏提供）



滝野川区小原町会の防空訓練（ふじの野市立上瀬川歴史民俗資料館所蔵）

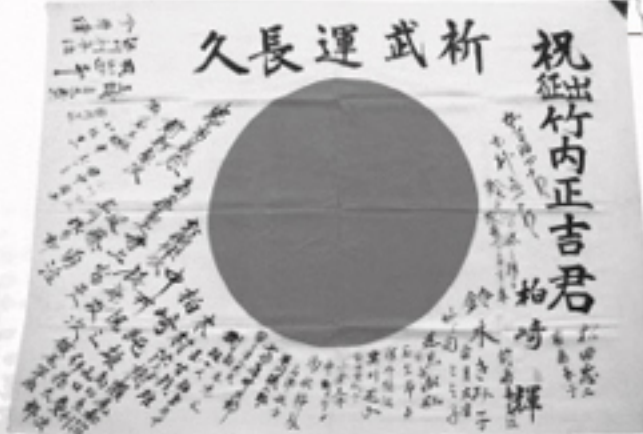


戦線は大陸の奥地へ

「満州事変」や日中戦争が始まった当初、政府は戦争の拡大を望まなかった。しかし、現地の陸軍部隊は大陸の奥深くまで兵を進めた。

「満州事変」、日中戦争、太平洋戦争と戦争の規模は拡大し、多くの国民やその家族が兵士として出征していった。戦局の悪化により、比較的年齢の高い者までが徴兵された。戦争は、日本にも交戦国にも、多くの犠牲をもたらした。第二次世界大戦での死者、行方不明者数は、兵士、一般の民衆を含め人類史上最大であった。

戦場へ戦場へ



日の丸封書 昭和19年(竹内正吉氏提供)

寄せ書き

日の丸の寄せ書きには、戦場や近所の人々、親戚や友人などが、それぞれの思いを込めて氏名や言葉を書いた。兵士たちは、日の丸の寄せ書きを肩にかけ、奉公袋を持ち、千人針を腹に巻いて故郷をあとにした。



日の丸封書 主に海軍川口支隊関係者による(加藤一氏提供)



日の丸封書(三好雅行氏提供)



入営記念(宮坂吉郎氏提供)



徴兵保険のパンフレット(本村克治氏提供)

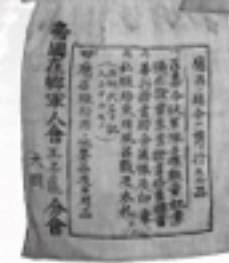
出征

多くの人々は、それぞれの本籍地近くの部隊に召集された。昭和十六年(一九四一)以降、陸軍で配られた「軍隊手帳」には、戦陣訓の「生きて虜囚の辱めを受けず」という言葉があった。

軍隊手帳に書かれた戦陣訓の一部分(故宮田利雄氏提供)



奉公袋(裏) 軍隊に行くときの必需品を入れた



奉公袋(裏) (大岡富士雄氏提供)



入営記念(北区行政資料センター所蔵)



当時の兵士の様子 (このページの写真は全て藤田和典氏提供)



出征軍慰安会
(加藤秋一氏提供)



滝野川区による公葬(北区行政資料センター所蔵)



滝野川区公葬の模様(北区行政資料センター所蔵)

出征兵士の家族たち

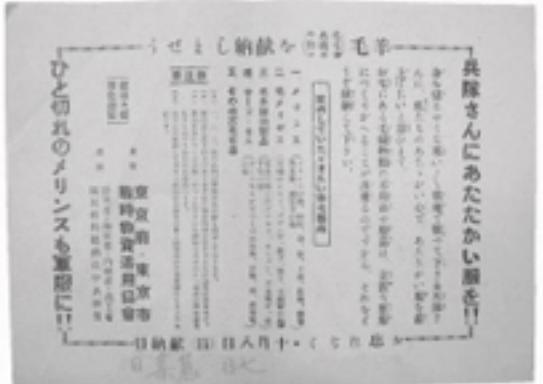
多くの区民や
その家族が、戦場
で帰らぬ人となっ
た。一方、国内に
おいて、報道機関
は戦果を誇大に
伝え続けた。

国内に残された家族たちは、
出征した息子や夫、父親の無事を祈り、
慰問袋や手紙を送った。
食糧は不足し、生活は苦しかった。
新聞は戦果を誇大に報じ、
ラジオからは戦時歌謡が流れていた。

銃後の国民生活



衣料切符 衣料品を購入するために必要だった
(北区行政資料センター所蔵)



羊毛の献納を新えるチラシ(国巻麻子氏提供)

食糧や衣類の不足

国内では、食糧や衣類が
不足し、廃品の再利用や
節約が強調された。



経済戦災経つ先のチラシ 物資の節約などを新えている
(国巻麻子氏提供)



家庭用小麦粉購入券「高本勘一郎日記」に
はさみ込まれていたもの(高本孝子氏提供)



滝野川区の公葬で遺族を迎える女性団体(北区行政資料センター所蔵)



戦果を誇大に報じた新聞記事のスクラップ(三好雅行氏提供)



「兵隊さんに喜ばれる慰問袋の作り方」
東京市戦後奉公会聯合会発行
(木村文治氏提供)



慰問袋

慰問袋は、町内会
や学校などを通じて
集められた。その中に
は、手紙や雑誌、お菓
子や豆類、雑貨などが
入れられた。船便で戦
地の兵士たちに送られ、
礼状が返ってくるこ
もあった。



慰問袋を載せた滝野川区のトラック 滝野川区役所前にて(北区行政資料センター所蔵)

戦中戦後に流行した歌

昭和13年	人生劇場	夜と月夜	
昭和14年	父よあなたに強かった	一杯のコーヒーから	九段の母
昭和15年	蘇州夜曲	月月火水木金金	蘭船
昭和16年	たきび	森の水車	そうだその意気
昭和17年	朝だ元気で	空の神兵	うれしいひな祭
昭和18年	加藤半蔵隊長	若葉の歌	ラバウル海軍航空隊
昭和19年	特許の歌	勝利の日まで	義武
昭和20年	お山の杉の子		
昭和21年	リンゴの唄	離人の歌	東京の花売娘
昭和22年	輝く小鳩よ	夜霧のブルース	星の流れに

(参照:古沢田信男ほか編「新編日本流行歌史」中、社会思想社)

陸軍造兵廠火工廠保育所の運動会
(北区行政資料センター所蔵)



体力検定を知らせる王子区国民学校 昭和18年
(清水宮一氏提供)

健民健兵

戦時下では、国民、特に青少年の健康増進や体力づくりが推進された。政府や軍は、健康な青少年が強い兵士になると考えたのである。昭和十三年(一九三八年)には国民体力法の制定によって「体力手帳」が配布されるようになった。区内では、昭和十二年、飛鳥山にグラウンドが造られ、区民の体力づくりや学校の運動会に使用された。



体力手帳 昭和17年(鎌美津子氏提供)



飛鳥山グラウンドで開催された運動会
(滝野川第三小学校昭和15年卒業アルバムより転載)



「体位向上」や「心身健康」を教える視光パンフレット
(坂川崎五郎氏提供)

子どもたちは「少国民」と呼ばれ、大人たちの戦争に巻き込まれていった。小学校は国民学校に改められ、学童疎開で家族は離ればなれになった。

学童疎開

空襲の危険から児童を遠ざけるため、昭和十九年(一九四四年)七月、東京都は三年生から六年生までの児童に對する集団疎開を実施した。北区域の各国民学校児童は、群馬県内へ疎開した。



神谷国民学校の疎開先群馬県長岡寺にて
炊事当番(鈴木和子氏提供)



神谷国民学校の疎開先群馬県長岡寺で木を植えて手廻り
(鈴木和子氏提供)

戦時下の子どもたち



王子第一尋常小学校の演劇「三つの銃弾」(倉本常夫氏提供)



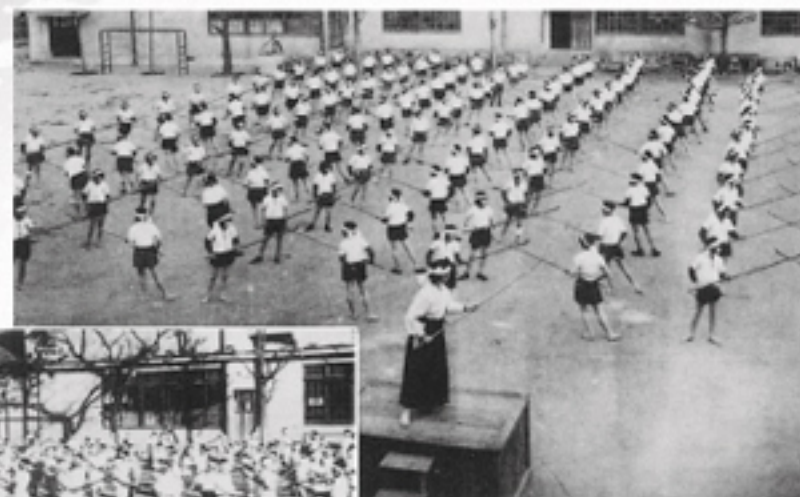
旗かぶとを被り日の丸を持つ少年(倉本常夫氏提供)



作文「五年生の覚悟」昭和20年
訂正箇所が、当時の教育内容を示している
(竹村孝三氏提供)

戦時下の教育

昭和十六年(一九四一)、小学校は国民学校へ改められた。戦時下の学校では、軍国主義的教育がなされていた。放課後も、子どもたちは戦争について夢中だった。



なぎなたや剣道の練習をする児童
(滝野川第三国民学校昭和19年卒業アルバムより転載)



群馬県立神谷国民学校に疎開した神谷国民学校の児童が、病気のために薄京した小野由直先生に受けた手紙(北区行政資料センター所蔵)

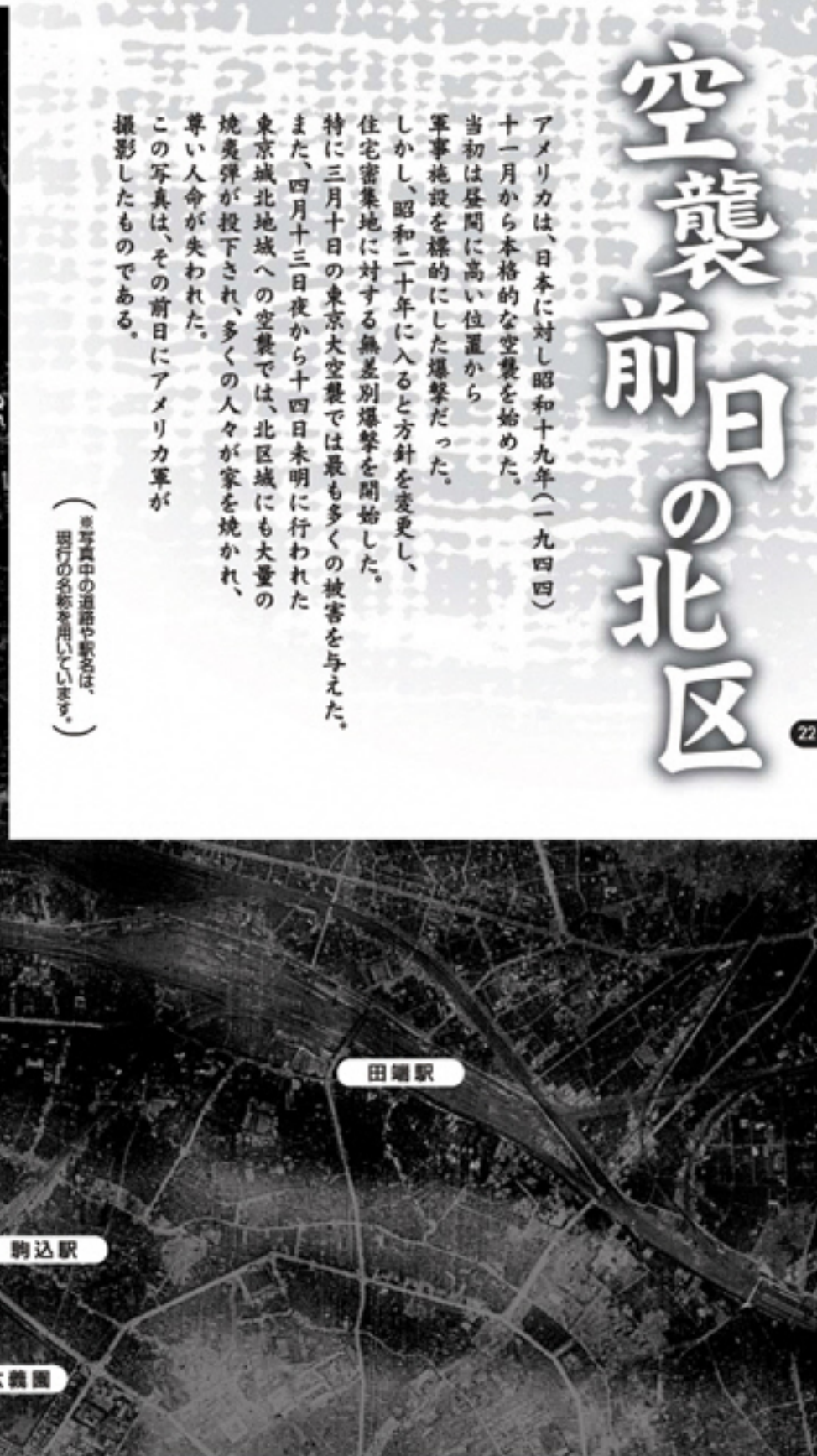
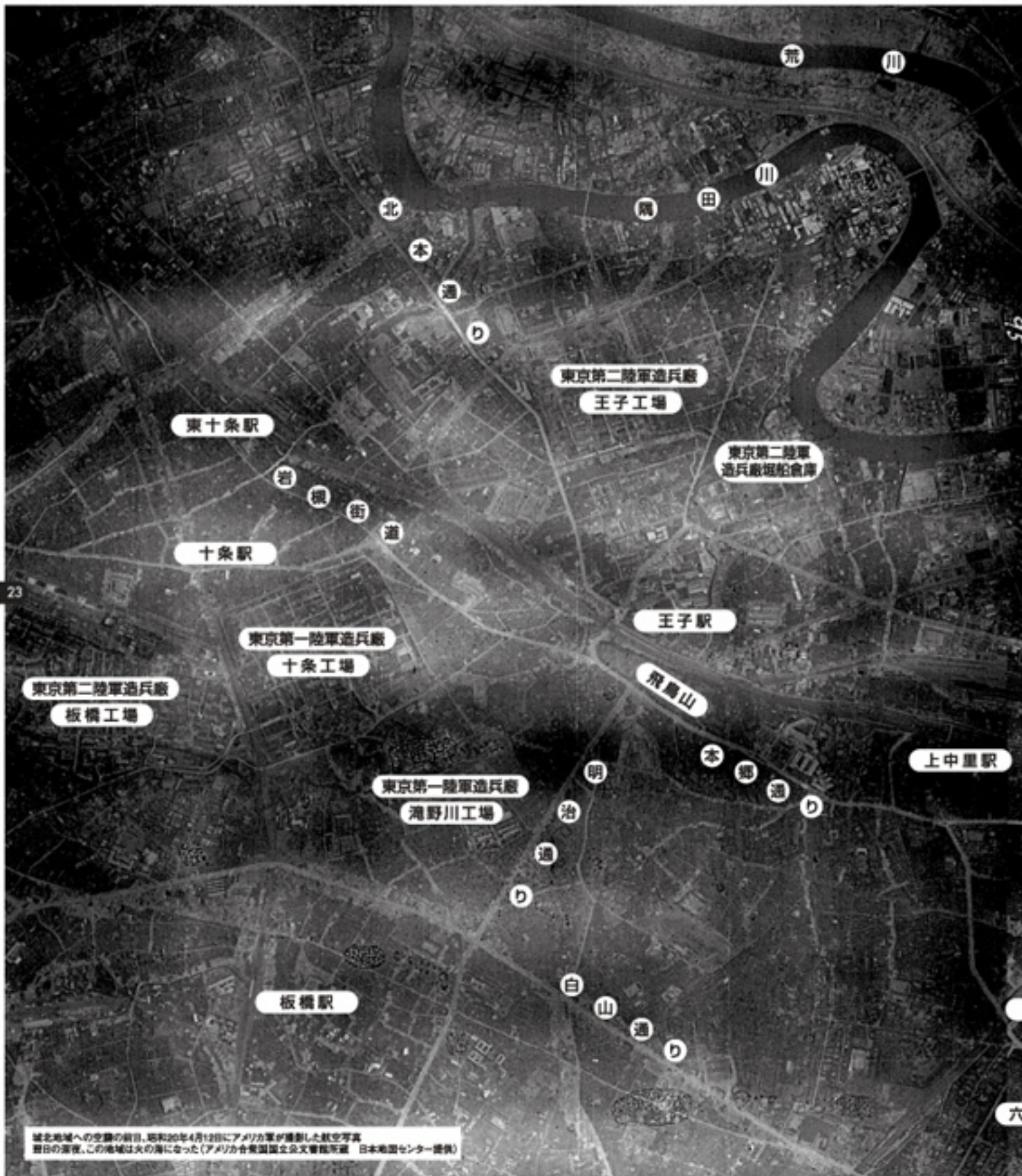


伊勢保田屋旅館に疎開した王子第一国民学校児童 昭和19年(河原藤夫氏提供)

空襲前日の北区

アメリカは、日本に対し昭和十九年（一九四四）十一月から本格的な空襲を始めた。当初は昼間に高い位置から軍事施設を標的にした爆撃だった。しかし、昭和二十年に入ると方針を変更し、住宅密集地に対する無差別爆撃を開始した。特に三月十日の東京大空襲では最も多くの被害を与えた。また、四月十三日夜から十四日未明に行われた東京城北地域への空襲では、北区域にも大量の焼夷弾が投下され、多くの人々が家を焼かれ、尊い人命が失われた。この写真は、その前日にアメリカ軍が撮影したものである。

（※写真中の道路や駅名は、
現行の名称を用いています。）





多くの遺体が安置されたことを伝える石碑（神谷公園）



昭和57年、東十条で発見された1トン爆弾（北区行政資料センター所蔵）

空襲の被害

日本への空襲には、油
脂焼夷弾が多く使われ
た。木造住宅を燃やす
ため、ゼリー状の油を入
れた金属の筒が地上に
降り注いだのである。

昭和二十年（一九四五）四月十三日二十三時零分、
空襲警報が発令された。
以後、三時間にわたり東京城北地域に対し焼夷弾が投下された。
大火災は、多くの家を飲み込み、尊い人命を奪った。
この頃から、アメリカ軍は、昼間に低空から軍事施設を攻撃
する精密爆撃を開始した。日本近海に航空母艦を進出させ、
艦載機による護衛が付けられるようになったのである。
この戦法により、八月十日の朝十時頃には、赤羽周辺の
軍事施設をめがけて1トン爆弾などによる空襲が行われた。
終戦の五日前だった。

区民にとつての戦禍



校庭に掘られた防空壕（滝野川第三国民学校昭和19年卒業アルバムより転載）

空襲への備え

区内各所には、
防空壕が造られ
防火用水が設
置された。特に、
京浜東北線沿い
や飛鳥山公園の
周囲には、多く
の防空壕が掘ら
れた。



防空壕掘り（北区行政資料センター所蔵）



戦後見つかった防空壕（北区行政資料センター所蔵）



王子区を警備していた憲兵小隊長が使用していた地図
遺物調査の場所や重要施設、空襲の被害状況が記入されている（田原朝成氏提供）



被災証明書 昭和20年4月16日
（鎌倉津子氏提供）



空襲で壁面が黒くなった大谷石の蔵（田嶋1丁目）



防火用水として使用された中里金比羅宮の天水桶
（中里2丁目）



戦後解体されるコンクリート製防空壕（加藤欣一氏提供）



空襲で破壊され、戦後に修復された板谷波山（陶楽家）の家
当時が瓦葺であったが、現在では築城源流西市の板谷波山記念館に移築

空襲のきずあと

空襲の夜が明けた
昭和二十年四月十四日朝、
王子駅前には、焼け野原が広がり、
石造りの銀行がボツンと残っていた。



終戦から復興へ

第2章



香取の合地上にあった陸軍射撃場の高射砲。占領軍により砲身が切断された。(故渡辺肇氏撮影)

終戦の日

昭和二十年（一九四五）八月十五日、生き地獄のようだった長い戦争の日々は敗戦で終わった。演習場や射撃場の劇しい音響も引込線の貨車の音も、工場の操音もハタと止まり空に飛行機の影もない。不思議な静かさが漂った。それが終戦の日だった。

（故渡辺肇氏記）

北区の空襲

日付	空襲時刻	被災地域	主な被災建物	死者	負傷者	被災建物	被災者
昭和19年12月3日	13:50~15:53	滝野川町/西ヶ原町					
昭和19年12月27日	12:10~14:20	豊島8丁目/日本フェルト北側/神谷町2丁目/神谷橋下流河中/菰木路一荒川側	神谷橋に繋留中の伝馬船1艘沈没			1	
昭和20年1月27日	14:03~15:10	稲付町/志茂町		1	1	2	24
昭和20年2月19日	14:40~15:48	豊島2~8丁目/王子4丁目/滝野川町	第一工業製薬・王子倉庫・日本興業付込・第二造兵廠	32	27	126	1,128
昭和20年2月25日	14:15~16:03	中里町/田端町/田端新町	浜野織造工場・中外化工・京三電線・東京インキ	3	7	93	338
昭和20年3月4日	8:45~10:00	滝野川町/西ヶ原町	滝野川第一女子商業・大沢病院・大塚車庫滝野川分庫	20	5	678	1,390
昭和20年3月10日	0:08~2:35	西ヶ原町/田端町			5	14	50
昭和20年4月12日	10:58~11:55	東十条町/中十条町/滝野川町		1	7	8	
昭和20年4月13~14日	23:18~2:22	赤羽町/稲付町1~3丁目/稲付島下町/稲付山井根町/志茂町/神谷町/東十条町/中十条1・2・5丁目/上十条2~5丁目/豊島町/王子町/岸町/豊島山谷津/滝野川区大部分/尾船1・2丁目	区役所・警察署・消防署・税務署・労働委員署・電話局・郵便局・印刷局抄紙部・第一造兵廠・第二造兵廠・機造試験場・被服本廠・工兵隊兵舎・兵器補給廠・保土ヶ谷化学・理研チューン・高島屋工業・印刷社・国営航空機・兵部省・田中航空部・大塚製作所・王子製紙・日本フェルト・日本油・日本特殊合金・印刷局倉庫・田端駅・尾久駅・赤羽駅	322	1,499	29,235	118,727
昭和20年5月24~25日	22:30~1:30	稲付4丁目/神谷町/上十条4・5丁目/上条中原/王子2丁目/岸町/田端町		14	62	637	2,651
昭和20年8月3日	10:50~11:32	赤羽駅構内/上十条1丁目/滝野川町		1	8		
昭和20年8月10日	9:40~10:26	袋町1~3丁目/稲付2・4・5丁目/東十条5~7丁目/上条中原/中十条	成立工業学校・板紙工業・三陽製作所・上林組・東洋ペーパリング・太陽製紙・三合製作所・日本製紙	151	272	1,467	5,909

『東京大空襲・戦災録』第3巻（東京空襲を記録する会 昭和48年）より作成



『東京都北区戦災焼失区域図』より作成



切り崩された火薬庫の箇所(放浪辺華氏撮影)



横山に掘られた火薬庫
(放浪辺華氏撮影)

割ヶ丘一丁目にあった陸軍兵器補給廠の火薬庫。兵士がいなくなった後、爆発対策用の築山は姿を変えていった。

昭和二十年(一九四五)八月十五日正午、ラジオから終戦を告げる玉音放送が流れた。多くの区民が、職場や家庭、疎開先そして戦場で終戦を知った。同月二十八日には占領軍の先遣隊が厚木飛行場に到着し、三十日には連合国軍最高司令官マッカーサーが降り立った。

北区域では、九月十六日以降、赤羽の被服本廠に約千五百名のアメリカ兵が進駐した。当時の王子区が東京都に対して伝えたところによれば、荷物を満載にしたトラックで現れ、進駐は平静に行われたという。

軍の解体と占領



軍用貨車の姿がなくなった終戦後の引込線
(放浪辺華氏撮影)

かつて、赤羽八幡神社の下から赤羽台・赤羽西・西が丘を結ぶ引込線があった。戦前戦中は陸軍が使用し、戦後はアメリカ軍が利用した。終戦直後の引込線は、ただひたすら静かであつたという。

終戦直後の引込線



引込線で遊ぶ子ども(放浪辺華氏撮影)



終戦直後の火薬庫正面(放浪辺華氏撮影)

兵士がいなくなった軍用地

遺族にとっての戦後



北区戦没者追悼式並びに遺家族慰安会 昭和61年(北区行政資料センター所蔵)



北区遺家族慰安会 昭和30年
(北区行政資料センター所蔵)

戦争では多くの区民が尊い生命を失った。残された遺族たちは、それぞれの思いを胸に、戦後という混乱の時代を生きたのだ。



許可持ち物品一覧表
昭和21年(倉木常夫氏提供)



引込線明書 昭和21年(倉木常夫氏提供)

戦場からの引揚げ

戦場から引揚げた兵士たちは、日本各地の港を経て故郷へ戻ってきた。大津や東海・東山で終戦を迎えた兵士の多くが捕虜収容所へ送られていた。彼らは、帰国に際しては、わずかな衣類などを携帯することしか許されなかった。

一方、シベリアの収容所に送られた兵士たちには、強制労働が課せられた。厳しい寒さの中で命を落とした人も多かった。

米穀通帳

米穀通帳は、戦時中に始まった配給制度のなごりであった。米穀通帳が制度化されたのは昭和十六年（一九四一）だった。それが、ほぼ廃止されるのは、昭和五十六年の食糧管理法改正による。



主要食糧購入通帳 昭和26年（滋賀県子氏提供）



一般食糧購入通帳 昭和26年（市村一氏提供）



香取駅東口駅前広場（放送局氏提供）

ヤミ市から 商店街へ

香取駅東口のヤミ市には、ところせましと露天商が並んだ。やがて店には天幕や屋根が張られた。しばらくすると、露天商は姿を消し、駅前通りには多くの商店やパチンコ店が軒を並べるようになった。

戦時中の配給制度は、戦後もしばらく続いた。だが、それだけでは食糧は全く足りなかった。激しい物価上昇と食糧不足の中、人々は必死に食糧を求めた。わずかな空き地にも野菜を植え、ヤミ米を求めて郊外へ出かけた。ヤミ市には「リンゴの唄」が流れていたが、リンゴもミカンもあまりに高価で手が出せなかった。



香取駅東口駅前通り（放送局氏提供）



サンフランシスコ平和記念北米商業祭のポスター 昭和20年



香取駅前商店（民衆三三三商店）昭和26年（鈴木文夫氏提供）

買い出しとヤミ市



家庭菜園（放送局氏提供）



先工兵隊管理地に野/海で与れた八幡町会耕作地（放送局氏提供）

生きるための 家庭菜園

食糧難の時代、旧軍用地を利用した菜園や家庭菜園は、生きていくための手段だった。

焼け跡に ひろがった ヤミ市

駅前にはヤミ市がひろがった。なかには、焼けあとの私有地や建物跡地に、違法な露天商が並んだところもあった。価格は決して安くはなかったが、生活必需品や食糧を手に入れるため人々は露頭に群がった。



鶴が公園のヤミ市（放送局氏提供）



一山20円のミカン 昭和21年（放送局氏提供）



子どもと親で食糧買い出し（放送局氏提供）



ヤミ米を買いだ人が行き来した香取駅ホーム（放送局氏提供）

ヤミ米を求めて

配給だけでは食糧が不足し、人々はヤミ米などを求め、郊外へ買い出しに出かけた。着物を食糧に替えることはタケノコの皮をむくの似ているとして、「タケノコ生活」と呼ばれた。駅では警察官が取り締まり、せうかく手に入れた米を没収されることもあった。

昭和二十二年(一九四七)に日本国憲法が公布された。これにより、男女の法的地位は平等になり、女性も参政権を獲得した。昭和二十二年四月に行われた最初の北区議会議員選挙は、四十議席を百二十三名が争うという激戦だった。



戦後の北区議会議員選挙(赤羽駅西口) 昭和22年 (放送局蔵氏撮影)

新憲法下での選挙



電気冷蔵庫が普及する前に使用されていた冷蔵庫。最上段に氷を入れて使用(富士見農工コーポレーション蔵)

昭和二十年代後半になると、家庭生活は著しく変化を取り戻した。昭和二十八年頃から電気冷蔵庫、テレビ、電気洗濯機が普及し始めたが、あまりに高価だったため、普通のサラリーマン家庭が購入するのは困難だった。これらの電気製品は「三種の神器」と呼ばれ、昭和三十年の流行語になった。

家庭生活

テレビが普及する以前の茶の間の様子(富士見農工コーポレーション蔵)

GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)は、財閥解体・農地改革・教育改革など、民主化のための様々な政策を進めていった。一方、地方行政についての改革も行われ、昭和二十二年(一九四七)東京都の三十五区は、合併などにより二十三区に再編成された。これにより、王子区と滝野川区は合併し北区が誕生した。戦前の区長は官選であったが、同年四月に初めて公選による北区長選挙が行われた。

戦後の復興と民主化



ドラム缶の風呂(放送局蔵氏撮影)

制ヶ丘の陸軍兵器補給廠が火薬庫跡には、多くの引揚げ者が住み赤羽郷と呼ばれた。当初はドラム缶の風呂に入るなど不自由な生活が続いたが、生活協同組合などが設立され次第に生活しやすくなった。

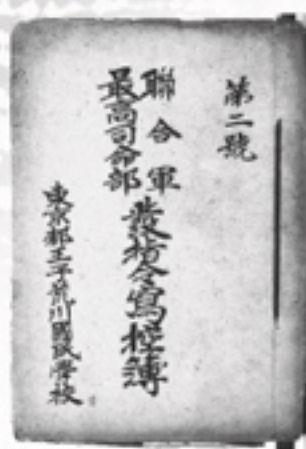


制ヶ丘文化生活協同組合(放送局蔵氏撮影)

引揚げ者が住んだ赤羽郷



DOT(除虫剤)が入っていた缶。製菓のDOTは、児童の服製のシラと誤用などに使われた(埼玉県博物館蔵)



GHQによる民主化の指令がとられた書籍(荒川小学校蔵)

戦後の学校

GHQの教育民主化方針により、古い教科書には墨が塗られた。新しい教材では民主主義が強調された。



国民学校昭和20年卒業生の卒業式。昭和20年の卒業式で卒業生を授けられた(北区行政資料センター蔵)

流行語の変化(昭和15年から30年)

昭和15年	ぜいたくは敵だ!
昭和16年	日月火水木金金
昭和17年	歌しがりません勝つまでは
昭和18年	真い出し屋
昭和19年	神島特別攻撃隊
昭和20年	一億総奮闘
昭和21年	カストリ文化
昭和22年	超インフレ
昭和23年	新戦線
昭和24年	ドッジライン
昭和25年	特需恐慌
昭和26年	老兵は死なず
昭和27年	君の名は
昭和28年	街頭テレビ
昭和29年	ゴジラ
昭和30年	三種の神器

(参考)廣瀬俊夫『昭和流行語辞典』、旺文社

キャンプ王子 返還運動

キャンプ王子(アメリカ陸軍野戦病院)は、地元住民が反対する中昭和四十二年(一九六八)に開設された。その後、昭和四十六年に日本への用地返還が実現した。一時、この土地を国が使用するという計画もあったが、区では公園や福祉施設にする運動を行い、翌年には、要所として中央公園文化センターや福祉施設などに使用することが決定した。



キャンプ王子跡地利用区民集会 昭和46年(北区行政資料センター所蔵)



区役所の宣伝カー(北区行政資料センター所蔵)

旧軍用地の多くは、終戦後、占領軍に接収され、TOD(東京兵器補給廠)として使用された。こうした土地は徐々に日本に返還され、学校や団地、公共施設、自衛隊の駐屯地などに変わっていった。なかには、民間工場や引揚げ者向けの開拓地に使用されたものもあった。最後に返還されたキャンプ王子(現・中央公園文化センター周辺)については、跡地を区民向けの施設に使用するため、住民と区が一体となり返還運動を行った。



キャンプ王子運動 昭和46年(北区行政資料センター所蔵)



開園での署名活動(北区行政資料センター所蔵)

軍用地解放への道のり



近衛工兵連隊跡地に開設された国立王子病院(現・北社会保険病院)(放送局蔵氏撮影)



軍用地の礎石は土の下に(放送局蔵氏撮影)

赤羽の台地側にあつた軍用地には、比較的早い時期に解放されたものが多かった。足立学園や国立王子病院(現・北社会保険病院)、桐ヶ丘団地などが、次々に造られていった。



第一師団工兵第一連隊跡地は足立学園へ(放送局蔵氏撮影)

返還される軍用地



戦車修理工場として使用された赤羽西5丁目のTOD第2地区(放送局蔵氏撮影)



公開されたアメリカ軍キャンプ(北区行政資料センター所蔵)

米軍施設として



アメリカ軍による給水 昭和30年(北区行政資料センター所蔵)



田舎沢で開かれた日米連絡協議会(北区行政資料センター所蔵)

区内には、戦後、TODや地政局などアメリカ軍の施設が残った。北区役所とアメリカ軍の間には、日米連絡協議会が設置され、軍施設がもたらす様々な問題について話し合われた。

北区戦争関係年表

年号(西暦)	北 区 の 動 き	日 本 の 動 き ・ 世 界 の 動 き
明治5年(一八七二)	赤羽の台地上に陸軍の火薬庫が設置される	徴兵令が布告される
6年(一八七三)		
7年(一八七四)	岩淵町を中心に、陸軍機動演習が実施される 明治天皇行幸	
10年(一八七七)	滝野川村で火薬製造所の建設が始まる	
20年(一八八七)	近衛工兵隊・第二師団工兵第二大隊が大手町から赤羽台に移転してくる	大日本帝国憲法が公布される 第一回帝国議会が開会する
22年(一八八九)		日本が清国艦隊を攻撃し、清国に宣戦布告する(日清戦争)
23年(一八九〇)	陸軍被服廠赤羽倉庫が完成する	
24年(一八九一)		日英同盟が締結される
27年(一八九四)	硫酸製造場(王子)が陸軍の所管となり、板橋火薬製造所分工場となる	日本がロシア艦隊を攻撃し、ロシアに宣戦布告する(日露戦争)
28年(一八九五)	西ヶ原に海軍下瀬火薬製造所が開設される	
32年(一九〇〇)		
35年(一九〇二)	王子火薬製造所、豊島に六万坪の用地を取得し拡張する(貯弾場)	
37年(一九〇四)	東京砲兵工廠銃包製造所が十条台に移転してくる	
38年(一九〇五)	板橋火薬製造所が稲付射撃場を設置する	
43年(一九一〇)	王子火薬製造所で火薬爆発事故が起る	韓国併合 日本がドイツに宣戦布告する(第一次世界大戦参戦)
大正3年(一九一四)	本所(豊田区)にあった陸軍被服本廠が赤羽に移転してくる	
8年(一九一九)	陸軍編成の替えにより、造兵廠火工廠が成立する	関東大震災 普通選挙法(男子のみ)、治安維持法が公布される
12年(一九二二)	陸軍令により、北豊島郡二町が本郷連隊区に定められる	中国柳条湖付近で「南満洲鉄道」爆破事件が起る(「満州事変」)
14年(一九二五)	海軍火薬庫(田下瀬火薬製造所)が京都舞鶴に移転する	「満州国」建国宣言
昭和6年(一九三一)	滝野川火薬庫(雷米場)で爆発事故が起る	海軍将校らが首相官邸を襲い大蔵蔵官相を暗殺する(五・一五事件)
7年(一九三二)	王子区・滝野川区が成立する	ドイツでナチス党が政権を獲得する
8年(一九三三)	王子区防護団発団式が挙行される	日本が国際連盟を脱退する
10年(一九三五)	飛行機「王子機」の命名式が北町(神谷三丁目)広場で行われる	国体明徴決議案を衆議院が満場一致で可決する
11年(一九三六)	北町で防護団総合演習が実施される	青年将校らが水田町を占拠し、国家改造を要求する(二・二六事件)
12年(一九三七)	赤羽の工兵第二大隊が、「満州」へ出征、周辺町会らが部隊を見送る	中国盧溝橋で日中両軍が衝突する(日中戦争)
13年(一九三八)	家庭防火群結成、焼夷弾実験が荒川放水路で実施される	日本が南京を占領する
	王子神社で戦勝・国威宣揚祈願式が挙行される	緒糸に割当制度が始まる(配給切符の第二号)
	飛鳥山グラウンドが開設される	国家総動員法が公布される
	灯火管制が実施される	
	銃後後援強化週間、廢品回収や出征家族の自宅訪問が実施される	

昭和14年(一九三九)	防護団が解散し、警防団へ編成替えが行われる	ノモンハンで日本軍とソ連軍・モンゴル軍が衝突する(ノモンハン事件)
15年(一九四〇)	砂糖・マシの切符制度が実施される	ドイツがポーランドへ侵攻を開始する(第二次世界大戦)
16年(一九四一)	紀元二六〇〇年奉祝運動会が飛鳥山で開催される	ベルリンで日独伊三国同盟が締結される
	通帳制による米の割当配給が開始される	大政翼賛会が結成される
17年(一九四二)	王子区役所で陸軍女子挺身隊結成式が挙行される(被服本廠で入所式)	日ソ中立条約が締結される
18年(一九四三)	王子・滝野川両区で防衛課・戦時生活課等が設置される	日本がフランス領インドシナ南部へ進駐する
19年(一九四四)	翼賛壮年団が結成される	ハワイ真珠湾を空襲、対アメリカイギリスなどに宣戦布告する(太平洋戦争)(12・8)
	滝野川・王子両区内に防空のため、空地地区を指定する	東京に初の空襲が行われる
	東京都が成立する	ミッドウェー海戦(6・5) 戦局の転機となり、以後、戦局が悪化する
	この頃 区内各所に防空壕や防火用貯水池が建設される	「学徒戦時勤労体制確立要綱」が決定、学生の勤労動員が徹底される
20年(一九四五)	空襲により、豊島地域を中心に大きな被害が出る(2・19)	上野動物園のライオンなど猛獣類が、空襲に備えて養育される
	城北地域の空襲で、王子・滝野川両区で壊滅的被害が出る(4・13・4・14)	学生・生徒の徴兵猶予特権が停止、以後、学徒出陣が増加する
	国民義勇隊が結成される	アメリカ軍がサイパン島に上陸する
		「学童集団疎開要綱」が閣議決定、学童集団疎開が始まる
		国民総武装決定、竹槍訓練などが開始される
		神風特別攻撃隊による休当たり攻撃を開始する
		東京大空襲、下町を中心に壊滅的な被害が生じる(3・9・3・10)
		アメリカ軍が沖縄本島に上陸する(4・1)
		ドイツが無条件降伏する(5・7)
		広島に原子爆弾が投下される(8・6)
		ソ連が日本に宣戦布告する(8・8)
		長崎に原子爆弾が投下される(8・9)
		ポツダム宣言を受諾し、無条件降伏する(第二次世界大戦終結)(8・15)

昭和20年(一九四五)	国立王子病院が近衛工兵隊跡地に移転、開設される 疎開児童の帰京が始まる	アメリカ艦船ミズーリ号で降伏文書の調印が行われる 国際連合が発足する GHQの指示により、修身・国史の授業停止、教科書の回収などが行われる
21年(一九四六)	赤羽復興会商店街商業協同組合(赤羽・番町商店街)が結成される	極東国際軍事裁判所が開廷し、戦犯の裁判が開始される 日本国憲法が公布される(11・3、翌年5・3施行)
22年(一九四七)	学校給食用として連合軍の放出物資が配給される 王子区・滝野川区が合併し、北区が成立する(3・15)	旧町内会・隣組が解散する
23年(一九四八)	旧陸軍火薬庫跡に都営住宅の建設が開始される	朝鮮戦争開始、警察予備隊(後の自衛隊)令が公布される サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約が締結される
25年(一九五〇)	講和記念戦没者追悼式が行われる	日本とソ連が共同宣言を採択し、国交が回復する 日本が国際連合に加盟する
26年(一九五一)	都営桐ヶ丘住宅団地の建設事業が決定する(昭和32年より工事開始)	日米相互協力および安全保障条約(新安保条約)発効
27年(一九五二)	TOD第四地区に自衛隊が入所、翌年、陸上自衛隊武器補給処十条支処として活動を開始する	東京オリンピック アメリカがベトナム戦争へ武力介入を始める 日韓基本条約が締結される
30年(一九五五)	北区日米連絡協議会が開かれる	
31年(一九五六)	旧陸軍被服本廠跡地に赤羽台団地が完成する	
33年(一九五八)		
35年(一九六〇)	アメリカ軍が地図局跡(キャンプ王子)に陸軍野戦病院の建設を始める アメリカ軍の王子野戦病院設置に反対するデモ隊と警官隊が衝突する 王子野戦病院の開所式が行われる キャンプ王子が日本政府へ全面返還される	沖縄返還協定が結ばれる(翌年、沖縄県発足) 日中国両首相が共同声明を発表し、国交が正常化する 第一次オイルショック
37年(一九六二)		
38年(一九六三)		
39年(一九六四)		
40年(一九六五)		
41年(一九六六)		
43年(一九六八)		
46年(一九七二)		
47年(一九七三)		
48年(一九七四)		
56年(一九八二)		
61年(一九八六)		

北区に残る戦争の記憶

第3章



太平洋戦争が終わりを告げてから、はや六十年の月日が流れた。戦争を体験した人々も少なくなり、失われていく戦争の記憶を語り継ぐことが困難な時代になってきている。そして、人々の記憶と同じように、北区も戦争の記憶を失いつつある。激動の時代を生きた人々と同じように、北区という地域自体も戦争の体験者なのだが…。

変わりゆく景色の中で、北区に残る戦争の記憶を訪ねてみた。

上：大正～昭和初年 陸軍造兵廠火工廠給養所 (北区行政資料センター所蔵)

中：昭和40年代 キャンプ王子

下：現在 中央公園文化センター



上空より見た陸軍被服本廠の全景（昭和22年・日本地図センター提供）



赤羽台団地付近全景（赤羽台1丁目付近）⑤



陸軍被服本廠（陸軍被服兵提供）

【陸軍被服本廠】

現・赤羽台団地の二帯には、軍服や軍靴などの製造、保管を行う陸軍被服本廠が設置されていた。かつて廠内を流れていた道筋は、現在も同地域の道路となっておりその姿を留めている。

北区域は、「軍都」と称されるほど数多くの軍事施設が集合していた。特に赤羽の台地上には、明治五年（一八七〇）に建設された軍の火薬庫をはじめとし、近衛工兵隊や第一師団工兵第一大隊、陸軍被服本廠など、様々な軍の施設が集中していた。

浮間・赤羽地域に残る戦争の面影



浮間橋の石碑（浮間橋北端、浮間1丁目）①

【浮間橋】
浮間橋は、荒川放水路の開削で荒川のようになつた浮間地域を結ぶため、近衛工兵隊によつて架けられた。橋の北端にある石碑には、架橋に至る経緯が詳細に記されている。

浮間橋の架橋工事（昭和3年頃）



陸軍第一師団工兵第一大隊（現・聖光学園、「工一記念館」より撮影）



赤羽神社（赤羽八幡神社境内、赤羽台4丁目）③

「工兵第一大隊」
明治二十年（一八八七）、架橋訓練ができる荒川が近いとの理由で、工兵第一大隊が赤羽へと転入してきた。八幡社境内にある赤羽相違社は、もともと同隊の兵舎内にあったものである。



日陸軍兵隊補給廠の建物（昭和36年撮影）



陸軍兵隊補給廠の参道（公費員宿舎西が丘住宅広場、西が丘3丁目）②

【陸軍兵隊補給廠】

現・国立スポーツ科学センターの一帯には、兵器の購買や保管、修理、支給などを行なう陸軍兵隊補給廠が設置されていた。西が丘三丁目に所在する公費員宿舎西が丘住宅広場の赤煉瓦は、かつて同廠の建物に使用されていたものを用いている。



参道脇を通る引込線（昭和30年頃・竹内町八氏提供）



引込線跡と混合の参道（赤羽八幡神社参道、赤羽台4丁目）④



貨物列車が走っていた頃（戦後・陸軍被服兵提供）



敷設された引込線の跡（赤羽線道公園、赤羽台3丁目付近）⑥

【軍用貨物引込線】
軍の関連物資を輸送するため、赤羽の台地上には旧国鉄の引込線が敷かれていた。線路は、赤羽駅の北側から分岐し、陸軍被服補給廠（現・国立スポーツ科学センター付近）まで続いていた。

このページは、40ページの地図と併せてご覧ください。



陸軍用地の礎石（赤羽小学校正門前、西が丘2丁目）⑦

【陸軍補付射撃場】

現・梅本小学校正門前には、「陸軍用地」の礎石は、この帯がかつて射撃場であったことを示している。また、同校裏手の通称に連なる高い山は、射撃場を囲っていたものの一部とされている。



戦時訓練を留めた跡（西が丘2丁目）⑧



東京第一陸軍造兵廠本部(中央公園文化センター、十条台1丁目)①



東京第一陸軍造兵廠254号棟(旧稲荷公園脇、十条台1丁目)②

【二五四号棟】
自衛隊二五四号棟は、大正七年(一九一八)、陸軍造兵廠の支店所として建設された建物。建物自体はすでに取り壊されているが、旧稲荷公園に隣接する防衛省敷地内(一般に開放)にその一部が保存されている。

王子十条地域に残る戦争の面影



東京第一陸軍造兵廠十条工場跡(自衛隊十条駐屯地)(昭和35年度、「武器補給第三十周年記念アルバム」より転載)



東京第一陸軍造兵廠275号棟(新中央図書館建設予定地、十条台1丁目)③



275号棟のマーク

【二七五号棟】
自衛隊二七五号棟は、陸軍造兵廠火工廠(造の前身)時代、大正八年(一九一九)に弾丸鋳造場として建設された。この建物をはじめ、当時の軍事施設は大量の赤煉瓦を使用しているが、この多くは隅田川沿岸に点在した煉瓦工場で焼かれたものが用いられた。平成二十年、二七五号棟は、その姿を留めながら北区新中央図書館に生まれ変わる予定である。

明治三十八年(一九〇五)、当時、小石川にあった東京砲兵工廠銃包製造所が下十条(現十条台一丁目)に用地を得て、この地で小銃や機関銃に用いる弾薬や蒸気、火薬類の製造を始めた。その後、陸軍の編成替えなどにより、昭和十五年(一九四〇)、東京第一陸軍造兵廠(通称一造)と改称することとなる。一造は、戦後アメリカ軍に接収された旧軍用地の中で、最も返還の遅れた場所でもあった。



稲荷社の跡地(旧稲荷公園、十条台1丁目)④

【十条工場跡地】
旧稲荷公園は、造兵廠十条工場敷地内に祀られていた稲荷社(四本木稲荷社)の跡地で、公園名はこれに由来する。廃社後、公園として整備されるが、園内には海軍慰霊碑が残されている。

【東京第一陸軍造兵廠本部】
中央公園文化センターは、かつて東京第一陸軍造兵廠の本部だった建物。戦後、米軍の極東地区局となり、現在の白色に塗り替えられた(41ページ写真参照)。



第一陸軍造兵廠十条工場の外壁(十条中学校、十条台1丁目)⑤

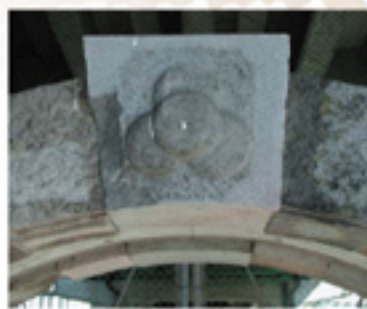


陸軍用地の碑石(王子本町2丁目)⑥

【陸軍用地碑石】
造兵廠十条工場は、十条台二丁目、王子本町三丁目を含む広大な敷地を有していた。写真の碑石はその境界を示したものである。

【十条工場外壁】
十条中学校の校庭を囲む西側の壁は、十条工場を囲んでいた赤煉瓦壁をモルタルで覆い、そのまま利用している。

【軍用貨物線】
近隣各所に点在する造兵廠の施設を結ぶため、物資輸送用の小型電車が敷設されていた。南橋陸橋下の公園には、当時のトンネルの枠石が移設、保存されている。



東京砲兵工廠の碑(左側の写真の部分拡大)

このページは、48ページの地図と併せてご覧ください。



軍用貨物線の跡地(ちんちん山児童遊園、王子2丁目)⑦



下瀬道(西ヶ原4丁目)①

【下瀬火薬製造所】
海軍技手下瀬源光が発明した強力火薬を大量生産するため、明治三十二年(一八九九)、西ヶ原の地に下瀬火薬製造所が創設された。戦前にはすでに廃止され、跡地は東京外国語大学となっていたが、現在では同大学も移転し、公園や福祉施設としての利用が予定されている。区内では珍しい海軍施設の跡である。



海軍用地の礎石(西ヶ原4丁目)②



豊島ドックの跡地(豊島公園、豊島2丁目)③



戦後の豊島ドック
(昭和30年代・豊田孝蔵氏提供)

【豊島ドック】
陸軍によって開削された物資輸送用の運河。東京第二造兵廠王子工場から石神井川を経て、隅田川へと通じていた。現在は埋め立てられ公園となっている。



積貨線(昭和45年・松石井平八氏提供)



積貨線を走っていた電気機関車
(昭和45年・松石井平八氏提供)

石神井川を中心としたこの一帯は、物資輸送の便利さや動力として水車を利用できることなどから、まさに近代工業施設の適地と考えられていた。明治十年(一八七七)、板橋火薬工場の附属施設として、滝野川火薬製造所が設置されたのも、こうした理由によるところが大きかった。また、各所に点在する軍や民間の工場を結ぶため、区内各所に物資輸送用の線路や運河が設けられていた。

【積貨線】
積貨線は、豊島地域に点在していた民間および軍の工場を結んでいた貨物専用の引込線。かつての路線跡を思い起させる道路も多い。

このページは、48ページの地図と併せてご覧ください。

滝野川・西ヶ原・豊島地域に残る戦争の面影



東京第一陸軍造兵廠滝野川工場(昭和30年代・日本地図センター提供)



海軍用地の礎石(滝野川3丁目)④



海軍用地の礎石(滝野川3丁目、滝野川2丁目)⑤



忠魂碑(西本木稲荷神社境内、滝野川3丁目)⑥



西本木稲荷神社(滝野川3丁目)⑦

【西本木稲荷神社】
稲荷神社は、もともと第一陸軍造兵廠滝野川工場の境内社だった。軍用地となる以前から同地に所在していたものを改修し、十条工場内にあった西本木稲荷社(45ページ参照)を分祀したものと伝えられる。

【忠魂碑】
西本木稲荷神社境内の忠魂碑は、火薬原料を運送する際に使用した庄磨盤を用いている。火薬を扱う工場では爆発事故も多く、この庄磨盤もそうした事故によって割れたものの一つと考えられている。

【憲兵の詰所】
豊島地域から延びた軍用貨物線の終点付近に設けられていた憲兵の詰所。ここで人や物資の動きが監視されていた。



憲兵の詰所(滝野川4丁目)⑧



現在の積貨線跡(豊島2丁目付近)⑨



©高波令子



『平和祈念像』北村西望作
(北とびあ前)



『平和の女神像』北村西望作
(鴉島山公園)

発 行 東京都北区
発 行 日 平成20年(2008)3月
刊行物登録番号 19-1-107
編 集 北区総務部総務課
東京都北区王子本町1-15-22
<http://www.city.kita.tokyo.jp/>
編 集 協 力 北区行政資料センター



※平成18年3月の発行以来、皆さまから寄せいただいた情報をもとに、内容の一部に修正を加えています。